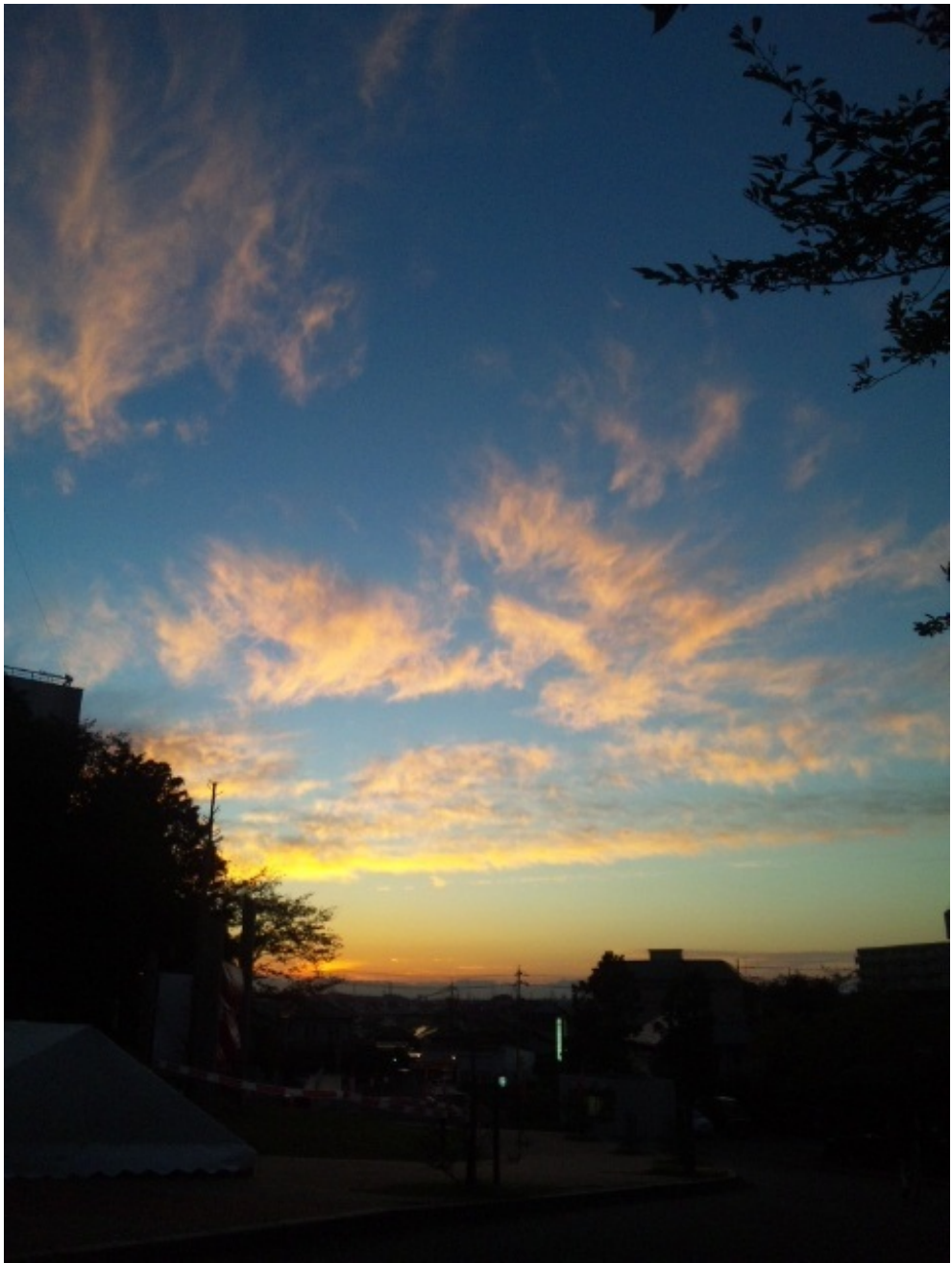






誰にも見られずに肩をふるわせる君の背中を
とても とても 大きく感じた。

誰の目にも触れない様
全ての苦悩を抱える君の肩・・。

だから 僕は、

何があっても君を守りたいと思ってしまふんだ・・。



この手には 生み出す力が在る。

この手には 壊す力が在る。

この心には 生み出す力がある。

この心には 壊す力がある。

忘れてはいけない 2つの選択・・



忘れそうだった “君”のコト。

大切だった “君”の存在。

大きかった “君”の存在。

いつからかな？

少しずつ生まれた 新しい存在。

“君の分”まで「大切にしたい」と思い始めたのは…。



ずっと隣で見守ってるから

だから

くもりない笑顔だけをみせていてほしいんだ。



届かない。

たった1枚の壁のむこうなのに。

届かない。

さっきまであったぬくもりが消えただけなのに。

あふれ出る泪

僕の目に映るのは 真っ暗な闇の世界だけ。。



それは　すごく単純なことで。

それは　すごくシンプルなかたち(かんじょう)。

でも　それが難しくて

意地や体裁ばかりが僕をじゃましてる。

もっと　真っ白なココロがほしいよ。。



君の声が聞こえる。

風に流れる詩のような心地よさに
僕は いつの間にか
溺れてしまいそうになっていた。

ほんの束の間の幸福感(幸せな時間)。

ねえ 僕は忘れないでいられるかなあ？



遠ざかる天穹(そら)に
遠ざかる疾風(かぜ)に
遠ざかる流水(みずおと)に

全てが 色褪せてゆくように
遠い 遠い 記憶の中の景色。



たいせつな きみへ

おてがみとどけます。

ほんのちょっとの きみのしあわせになりますように。

ほんのちょっとの きみのえがおになりますように。

ぼくのありったけのきもちをこめて
きみにとどけとねがいをこめて

おてがみ とどいているといいな・・

ほんのちょっとむかしの ぼくより



夢をみたよ。

遠い 遠い むかしのおもいで。

まだ 僕の隣の君は笑っていて
無邪気な笑顔だけがあふれてた

そんな笑顔に 僕もいつのまにか微笑んで・・

遠い昔の思い出に浸りながら
僕の心は ただ眠りにつくんだ・・。



どこまでも どこまでも 続く道

どこまでも どこまでも
まっすぐ走ってきた

振り返れば たくさんの景色があって・・・
振り返れば たくさんの出会いがあって・・・

何ものにも変えられない
一番の僕の宝物にできてきたのかな？



きみに 逢いたい。
きみに 伝えたい。

たくさんの ハートが溢れて
たくさんの 言葉がこぼれそうで

気持ちばかりがどんどん 形を作ってく。

いびつな形のキモチ。
いつか 君の元へ届く時はどんな・・・？

いっぽ。



歩き続けた道の先
僕は どれだけのモノを得られたんだろう。

忘れてしまいがちな日常に
溺れてしまいそうな日常に

何かが 残っている。
何かが 待っている。

かすかな 願いをこめて
僕は 今日の1歩を踏み出すことにしたんだ。。

いちばんまえ。



だれより ちかくで
だれより きみを
みているよ。

だから
あんしんして いておいで！



ポキッと音を立てて折れてしまったキモチ。

足掻けば足掻こうとするほど
どんどん深みにはまる・・

だから
今は じっと見守っている。

いつか 何倍にも強くなって
ただ真っ直ぐにのばしたいと願うから・・



まるで 水の中みたい。

必死になればなるほど、
中々うまく浮きあがれなくて・・・。
それでも、浮きあがるリミットがあるから
あがくしなくて・・・

凄く 凄く 苦しいのに

凄く 凄く つらいのに

それを口に出すことも出来なくて・・・

そんな苦しみの中で
僕らは生きているみたい・・・。



“知って欲しい”はダメなの？

“分かって欲しい”は望んではいけない？

知りたい 分かりたい

でも・・・

僕のキモチは
いつも 何処かで止まってしまう・・・。



心が　どんどん腐ってゆく・・・

とっくの昔に　折れた心
その折れ目から　傷が膿み
いつしか　痛みも苦しみも無く
ただ　ただ　腐りゆく心。

この腐敗は
何時か　止まるのだろうか・・・

ただ　漠然と
僕は　願う・・・。



いざないの詩(うた)に導かれ
星降る夜に 僕等は出逢った・・

何処か感じる懐かしさ
僕等は ずっと知ってたんだ
ずっと昔 重ねた手、離れた時を・・

姿(かたち)は変わっても魂(こころ)は変わらない

ガラスの墓標に葬られたキオク
それは 決して開いてはいけない箱
夢から醒めた夢の中で
僕は 君の面影を求め続けるよ。



君という名の 1 番星。

そのまばたきは
あまりに まぶしくて
あまりに 強くて
僕は 思わず まぶたを閉じそうになってしまう・・・

けれど、
その輝きは 一瞬の内に変わってしまうから
ねえ、その光りから目を離さないでいて・・・
そのはかない輝きを 見守り続けて・・・



歩くこと 止めてしまうのはズルいですか？

歩くこと 少し自分のペースを守りたい
それは許されない我慢ですか？

守りたい 僕がある。

つらぬきたい 僕がいる。

誰よりも 自分に甘いかも知れない・・・。

でも

誰よりも厳しいから 時には許して欲しいんだ・・・。

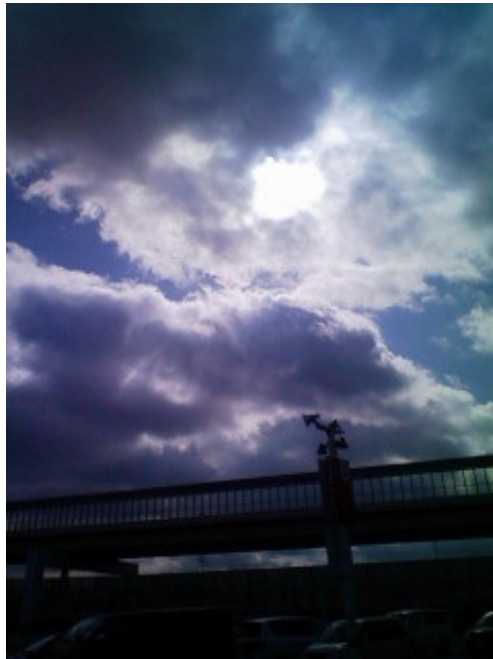


僕は 禁忌を犯す。

たった1人 “君”という存在の為に。

楽園に見えた 1つの夢は
セカイの終わりを示していたのに・・・。

それでも、
僕は、望んで、
手を伸ばしてしまったんだ・・・。



楽園に最後の花が咲き
一迅の風が吹き抜け
嵐が生まれた
誰かの遠き詩声が響き
海が穏やかに揺れて
波が生まれた

優しい時代(とき)の中で交わされた約束
神話(まぼろし)の世界

時を彷徨う旅人は
見えることの無い国境(せん)を
ただただ 願い 歩み続ける
いつか 道(たび)の終わる処(ばしょ)を
捜しながら・・・

たとえ その身が朽ちゆく日がきたとしても・・・



僕等は大人になって
どれだけのものを 手に入れられた？

僕等は大人になって
どれだけのものを 失った・・・？

失ったものの方が
視界に 記憶に 大きく大きく映り過ぎて

僕は “小ささ”ばかりを
感じてしまうんだ・・・。



今日も 街は動いてゆく
流れる人の中
僕は 横断歩道の白い部分だけを歩いてみる
まるで ありがちな冒険活劇(RPG)みたいな単純なGAME

ただ前だけを見て進み続ける
君の背中だけを その目の中に夢見(み)て・・・

沢山の宙(そら)を数えた
オレンジ色に染まってく夜空(そら)
地形図の様に蒼の中に広がる白を
自分と重ねて 指でなぞってみた

冷えきった冬の空気の中で
夜空に透(と)けてゆく白く吐いた息
まるで ゆうべみた夢の中の君みたいな

ほんの一瞬の幻影(まぼろし)



誰かの「ありがとう」が嬉しくて
言ノ葉を紡いでいく・・・。

願わくば、

この魂のカケラタチが
君の心を ほんのりと灯します様に・・・。

たったひとつの願いの為に・・



たった1つの願いの為に

僕は

そのセカイを壊しにゆくよ・・。

“君”だけを求めて。



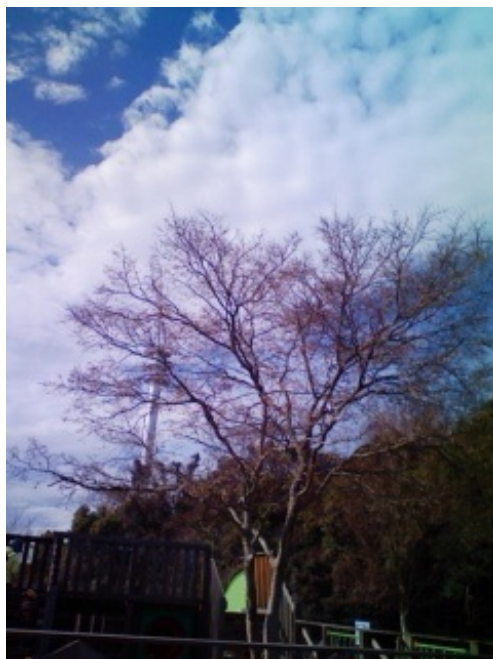
雨あがり つめたくて澄んだ空気
風のおい感じながら
僕は 水溜りだらけの道をゆく

子どもみたいに わくわくしたココロ
いっぱいにあふれてる
街に残った 雨のアト
空が映る水たまりを
僕は 思い切り飛び越えたんだ

夕立がくる
傘も持たず 飛び出したあの日
いつの間にか忘れてしまってたんだね。
雨の音に包まれながら
ただ ココロ満たしたあの日

ビー玉に映る景色みたいに
安っぽいけど 優しい世界
懐かしさと 忘れたキオクを
そっと還してくれるよ

夕立の前
そっと目を閉じると
雨の音 アメの匂い
ほんの少しのまぼろしを見ながら
雨あがりを待つんだ・・



もし 夢にカタチがあったなら
それは どんなカタチしてるんだろう？

叶わずに胸にだけ残った夢
叶えたいと手を伸ばし続けている夢
叶える前に何処かに置き去りにしてきた夢
叶えられずに壊れてしまった夢

タクサン、タクサンの 夢のカタチ
見えないカタチを想いながら
今日も 僕は夢をみるんだ・・・。

もし 世界にカタチがあったなら
それは どんなカタチしてるんだろう？

吹き抜ける一すじの風
遥か空の果て
温かく降りそそぎあふれる光
時間(とき)の流れ

タクサン、タクサンの世界のカタチ
カタチにあふれたこの世界
僕らも ひとつのカタチ取るモノ。
それでも どこか満たされなくて
さらに 存在(カタチ)求めて・・・。

安息につながらないココロ持って
僕はセカイに眠るんだ・・・。

変わらず願う。



いつも となりにいてくれた
いつも 気持ちを分けあった

そんな君の幸せを
他の誰より 願っているよ。

ずっと ずっと そばで・・
ずっと ずっと 君のコトを・・。

僕の在処(ばしょ)。



遠ざかる天空(そら)

色付く雲 に 流れる空気

いつでも 僕は真ん中で

優しい天(そら)に包まれている・・・。



ガラクタ(おもちゃ)の様なセカイで
僕は虚像(ゆめ)ばかりみてたんだ・・・。

いつか
あの窓から 箱庭(セカイ)の中から
飛び出すために・・・。

優しさに流れたら・・



優しい 優しい

雨に降られたら

悲しみの涙(あめ)も

流れてゆくだろうか・・



ただ 君のそばで・・
ただ 君のために・・
ただただ となりにいたい。

君を傷つけないように、
君が傷つかないように、

宝物のように 守り続けるから・・。



僕の たった1つの夢。

それは
儚くも 淡い

ほんの小さな
幸福(コウフク)のひと時だったんだ。



誰かに言われた
“ありがとう”が とてもとても嬉しくて

誰かに言われた
“おめでとう”が こんなにこんなに
温かすぎて・・

幸せでいっぱいの胸がこぼれて
涙があふれていたんだ・・



真っ白な紙の上に
僕等はただ在_(あ)った・・・。

訪れる者のいないセカイに
ただ　ただ　在_(あ)った。

いつか　捨て去られる日を待ち
その場で結末_(おわり)を待つ・・・

願いも　希望も
何もかもを　捨て去って・・・。



きっと 言うべきじゃなかったんだ・・

その言い訳(りゆう)は
君を守る為じゃなく
ただ 君をつき離すコトバだったから・・

それは ただ
君から逃げる為のコトバ(モノ)だったから・・



ずっと ずっと

大好きよ。

ずっと ずっと

大切よ。



人間(ヒト)って不思議なもので

嫌われた事があればある程

嫌われる事が怖くなる。